

鳥たちをよく観察できるのは冬だ。木々の葉が枯れて落ちるので鳥が丸見えになる。それに餌台で寄せているので間近まで来ることになる。餌台は三つ用意している。野鳥に餌をやるのはどうのこうのと言っているのに三つもかと言われそうだが、それには私たちがなりの理由がある。家の近くまで良く来るのはヒヨドリと、シジュウカラなどの小型の鳥と、アカゲラなどのキツツキだ。それぞれに体格も違うし好みも違う。ヒヨドリにはリンゴなどの果物、シジュウカラたちにはヒマワリやアワなどの粒餌、アカゲラなどには脂身と、それぞれに餌台を別にし、互いの距離も保つことで余計な争いを起こさないように考えた。また、台の構造も横枝に止まるタイプと幹に止まるタイプというようにそれぞれの鳥の足の構造に合わせて工夫してみた。

最初は、餌のやり過ぎは良く無いと、少しだけあげるようにした。そうするとシジュウカラやハシブトガラやゴジュウカラなどは餌台の周辺の木に一旦止まり、それから餌台に来るのだが、ほとんど一斉に来ることはない。誰か一羽が餌台に行つて餌を啜えて枝に戻るのを、他の鳥は待っていたのだ。そして、順番に餌台に行つて平和な食事の時間で終わるのだ。これは一回だけのことではなく良く見られた。雪が深く寒さも厳しくなつて、つい、いつもより多めに餌を入れてみた。皆喜ぶだろうなと思つたら、今まで大人しく譲り合つて順番に餌台に行つていたのが、一斉に来て、互いに相手を牽制し時には攻撃的に威嚇して沢山の餌を独り占めしようとし出したのだ。偶然いろいろなることが重なつてそういう行動になつたのかもしれないが、何か考えさせられる出来事だつた。食べるものが少ないと分かち合い、不自由ないほど食べるものがあるとならば独り占めしたくなる。そう見えないこともない。

餌台を三種にして距離を離れたのは一定の効果があつたようで、互いに他の餌台に行くことはなかった。ところが、そこにカケスが登場すると状況は一変した。カケスは数羽でグループをつくつて行動するのを良く目にする。体格も一段と良い。私たちはそれを「カケス三兄弟」と呼んでいたが血縁のほどはわからない。彼らはどの餌台も御構い無しに食べ散らかす。そして、ある程度食べ終わつても餌台に居座り、他の小鳥たちが近づこうとすると威嚇して追い払う。この餌台は我々もものだと言わんばかりの態度だ。

餌台を守ろうという気持ちはヒヨドリも同じだが、態度はぜんぜん違う。リンゴの餌台の近くの枝に止まつてじつと餌台を見守っているが、小鳥がリンゴに近づいても飛んで行つて追い払うまではしない。ただ、羽がプルプル震えているので嫌がっているのは間違いないさそうだ。ただただ餌台の近くから離れずにじつとしている。それも冷たい雪がふりつけようがじつと耐えている。不慣れな感じのするやつだ。

そんな冬のある日、外出から帰つて玄関先まで来たら、突然、ゴジュウカラがまっしぐらに私の方に飛んで来て、頭の上に止まつて肩に降りこちらを見るではないか。餌もないのに。少し鳥の気持ちに近づけているのだろうか。

